

# 第一号の特例子会社は、 いまでも健在

—シャープ特選工業株式会社—

職場  
レポート

EMPLOYEE REPORT

(文) 清原れい子 (写真) 小山博孝



シャープ特選工業株式会社

〒545-0021 大阪府大阪市阿倍野区阪南町7-9-12  
TEL 06-6694-3111 FAX 06-6694-3113



クリーンルーム内で生産が行われている

**シャープの製品とともに、  
事業は変遷**

一定の条件を満たせば、親会社の障害者雇用率に子会社で働く障害者数を算入できるという特例子会社制度が一九七七年にできて、約三〇年。今日では一八〇社を超えたが、その第一号がシャープの特例子会社「シャープ特選工業株式会社」である。前身はシャープの創業者、早川徳次氏が失明軍人のために戦時中につつた早川電機分工場で、一九五〇年に合資会社「特選金属工場」となった。当時、目の見えない人たちがプレス機械を扱い、金属加工を行うのは画期的なことと、日本の障害者雇用のパイオニアの一社と言われている。

プレス加工に始まった事業は、ラジ

オ・テレビ用部品、電卓プリント基板、電子レンジ操作パネルの組立、リモコン送信機の生産、D B S チューナの生産……と、シャープのエレクトロニクス事業の発展とともに拡大してきた。一九六三年に「早川特選金属工場」、七七年にシャープの特例子会社、八二年には現社名となり、働く人たちも、視覚障害者から聴覚障害者が多くなっている。

今日では、D V D 用レーザーチップの加工、液晶パネル用バックライトユニットの組立など、最先端のデジタル機器の部品生産を行い、二〇〇三年と〇五年にはISO 14001と9001も取得した。五〇年を超える社歴は、日本の製造業の歩みのようでもある。

大阪市阿倍野区のシャープ特選工業の応接室には、点字の文書が本棚に並び、創業のころからの製品サンプルが飾ってある。社長の馬郡繁（まぐら）さんはシャープのインドネシアの子会社勤務を経て、昨年三月に着任した。

「当社は、シャープ本体の事業に直結した製品を作り続けてきました。現在はデジタル家電の国内生産の一端を担って、エレクトロニクス業界の最先端の



植田和敏社長付参事

業務をさせていただいていますが、特例子会社だからといって、甘やかしてはくれません」

自助自立。ものづくりが海外にシフトしている中で、特例子会社とはいえ、特別な優遇はない。品質、コスト、納期など、発注条件は国内の協力会社と同じ。ミスがあれば、発注は他社へ切り替えられてしまう。

「与えられた経営資源の中で最大限の寄与ができるよう、社員に求めています。毎年、親会社の要求が維持できているか、生産管理体制や品質管理体制の審査があり、合格しないと継続して仕事が発注されません。四、五年に一度の事業の転換期がきていますので、次の世代のアイテムを模索しているところです」

取材に同行していただいたシャープ広報室参事の千原康志さんが一言。

馬郡繁社長



# 職場 ルポ



社員代表としても活躍する田中利和さん



外観検査を担当する宮本洋子さん

「シャープブランドが、世界中のお客様にご信頼いただけることが大事です。そのためには、どこの工場で作っても、品質は最高、環境にも十分配慮しているという状態でなければなりません」

## 専任者を配置。 社長とメールでやりとりも

現在、社員は一二二人。そのうちの約半数は障害者で、聴覚三五、肢体九、車いす四、内部二、視覚一、知的三と、五四人が働いている。

「インドネシアに五年いて、言葉が通じないという経験をしてきました。赴任が決まったとき、『たいへんですね』とも言われましたが、聴覚障害者とは日本語で筆談ができますので、違和感なく、すっと入っていました。何かあれば、ケータイメールでやりとりをして、比較的短い間に多くの社員とコミュニケーションがとれたのではないかと思っています」

社長室を社員に開放し、社長とのメール・ホットラインもある。半期に一回、会社方針の徹底会では手話通訳を頼むが、聴覚障害者には事前に内容をプリントして配っている。



液晶バックライトユニット組立の最終チェックをする田中裕美さん



「以前は原稿なしで話していましたが、こちらにきてからは事前に原稿を配っています。できるだけ文字を読んでわかるように、パワーポイントで説明するときには並行して原稿が出るようにしています」

社員の平均年齢は三六歳。勤続年数は約一〇年で、管理職のほとんどは三〇代だ。

「新しい事業にシフトした二〇〇〇年ぐらいから、世代交代と業務拡大で、意識して若い人たちを採用してきました。最先端技術の機械操作などは若い人のほうが得意です」

社長就任のあいさつ回りをしたとき、自社の障害者雇用が周囲に知られていないことにショックを受けた。

「特例子会社第一号で、創業者は大阪府身体障害者雇用促進協議会（現・大阪

府雇用開発協会）の初代会長でしたから、障害者ケアの専任者をおいて、対外的な活動に力を入れようと思いました。社内には、若い管理職ではむずかしい人間関係の問題もうまく解決していただいています」

シャープから出向して生産関係に従事していた植田和敏さんが昨年八月の定年を機に、社長付参事として障害者担当となった。障害者たちの、いわば「お父さん役」だ。

「障害者雇用関係の近畿ブロック会議やセミナーに参加したり、障害者からの相談を受けています。聴覚障害者とは筆談しています。手を差し伸べるのではなく、自立を大事にして、助けて欲しいと相談がきたら出て行くようにしています」

ろう学校の職場体験も受け入れている



簡単な手話で仕事を進める高橋さんたち



聴覚障害者のサッカー大会（デフリンピック）の日本代表をめざす高橋裕樹さん

建物内はバリアフリー。聴覚障害者にはランプの点滅で知らせる装置などの配

### 職場では コミュニケーションを大事に

「シャープ全体として、人を大事にするというイメージがあります。中でも『特選』は早川創業者の志が根づいている会社ですから、障害者の働きやすい会社にしていければと思っています」

好評でした。障害者は家族に頼る面が多いと思いますが、家族は高齢化していきまますから、頼る比率を少しずつ下げていってあげないと、本人にとっても不幸です。会社でどこまで真の自立の手助けができるか、模索中です」

が、採用に苦労はない。馬郡社長は、社員の家族との連携を大切に考えている。「昨年四月、聴覚障害者が四人入社したときには、ろう学校の先生と相談して入社式に親も呼び、職場も見ていただいたら、非常に

慮はあるが、障害者のための特別な工程はない。レーザーチップの加工と液晶パネル用バックライトユニットの組立は、クリーンルームで防塵服での作業だ。その姿からは、障害があるとはわからない。レーザーチップは、DVD、CDの読み取りのピックアップ、いわば心臓部に使われている。外観検査は、一〇〇ミクロン単位のチップを顕微鏡で見ながら、不良品を見つける。三交替二四時間稼働で、シャープのレーザーチップ生産の約三分の一を担う。

「最終組立は海外で行っていますが、レーザーチップの特性検査などは技術の生命線ですから、国内に残しています。高い技能が必要な仕事で、工程に入れるまでには六カ月ぐらいかかります」

外観検査を操業当初から担当するベテランが、宮本洋子さん。入社して一〇年。



入社して24年になる中島重人さん（第一生産部）

仕事の進め方を工夫する小集団活動のサブリーダーを務め、若手から頼りにされている。

「不良品を出さないように検査をすることに気をつけています。集中力が大事ですね。後から入ってきた人たちには、きちんと教えてあげたいです。頼られるのもうれしいですから、何でも聞いて欲しいです」

「健聴者とのコミュニケーションを大切にして、お互いに協力しながら、楽しく仕事ができるようにすることが大切だと思います。手話のできる人がいて、スムーズにコミュニケーションできるのがうれしいです。社長は明るくて開放的で、話しやすいですね」



サービスマニュアルを作成する外販部の大西昌弘さん

携帯電話の修理・サービスを行う  
平野事業所



成績優秀で、パートタイムから正社員になった田中裕美さん。バックライトユニット組立の最終チェックを担当する。四年前から毎日の朝礼で、手話通訳も務めている。

「聞こえる人たちとのコミュニケーションが一番多い部署なので、メモを取りながら、間違えないように何回も確認しています」

この部門の「お姉さん役」で、休日は子どもと遊んだり、家事を片付けたりと忙しい。

「家庭との両立で忙しいですが、ずっと働き続けたいです」

社員代表は、車いすの田中利和さん。二〇数年働き続けるベテラン社員で、組合がないので、労働協約などを結ぶときの経営者側の相手方になる。社長は、交渉相手としてたいへん話しやすいそうだ。

「障害者に必要な設備の整備とか、製品が通路に置かれていないかとか、事故が起きないように常日ごろから気をつけています」

## 社員のスポーツ、 社会活動を支援

シャープ特選工業では、社員の社会参画を積極的に支援、スポーツの全国大会

に出場する際には特別休暇や遠征補助金などで応援している。

この一二月、バンコクで行われる「第一回アジア太平洋ろう者サッカー選手権大会」の日本代表に選ばれたのは、バックライトのシート合わせ工程を担当する高橋裕樹さん。北海道出身だ。

「オープンな関西人が好きで、大阪にきました。仕事で目標を達成できなかったときには社長から怒られることもありますが、もつとがんばらなければという気持ちになります」

「現場のみんなで決めた目標だから、必ず守って下さいと言います」と社長。高橋さんのポジションはフォワードだ。

「当面の目標は、デフリンピックのサッカーの日本代表です。社長は理解があるので、ありがたいです。仕事と両立していきたいと思っています」

外販部の大西昌弘さんは入社一四年目で、仕事はサービスマニユアルの作成、発送など。車いすバスケットボールの選手としても活躍中だ。

「新規事業に取り組むときは、新しいことを覚えるのがたいへんです。通勤は電車です。二駅ですが、最寄り駅が階段しかないで、車で通勤しています。手話は使えないので、身振り手振りで話していますが、コミュニケーションを大切にしたいです」

中学校の人権教育の一環として、中学

携帯電話の修理・検査、後輩たちの指導にと活躍する  
竹元義人副主任



生に自らの体験を話すとき、会社は勤務として認めている。

「年二・三回、中学生に車いすバスケの説明をしたり、人権教育に行かせてもらっています。将来の夢は、次の障害者のためにもっと住みよい街にしたいということです。アクティブに行動していきたいですね」

もう一カ所、シャープ平野事業所内では、一五人の障害者が携帯電話の修理を行っている。受付から返却まで四八時間。朝、工場に入ると、夕方には修理を終える。

「生産は海外にシフトしても、需要は国内です。一定の比率で必ず残る仕事ですから、力を入れていきたいですね。携帯電話なしでは生きていけない若い人たちが多いので、時間的な要求は厳しく、土日シフト勤務です。スキルが必要ですから、習熟するまでに時間がかかりま

## WORKSHOP REPORT

パーツの準備、発送など  
知的障害者も働いている



す」

一日約二〇〇台。組立は聴覚障害者、通話、音声テストは健常者、パーツの準備作業などは知的障害者が担当する。携帯電話には個人情報が多く入っており、クレジット機能付きもあるので、神経を使う。

副主任の竹元義人さんは入社して四年。ライン管理担当だが、忙しいときは検査も担当し、後輩に組立の指導もする。

「修理は、機種がたくさんあるのでむずかしいですね。お客様からクレームがつかないように気をつけています」

平野生産部取締役部長の山本競さんは、シャープ特選工業とともに歩み、勤続四〇年を超えた。

「目の悪い人がプレス作業をしていて、最初はびっくりしました。仕事はどんどん変わって伸びてきましたが、なつかしいのはまだゆとりがあった入社当時、印象に残っているのは新しい仕事に取り組んだときです」

そのほか、勤続二四年の中島重人さんはじめ、お話をさせていただいたみなさん

に感謝です。

### ■ 本体の障害者雇用率も二%超

シャープの障害者雇用率は二・〇二%。人事本部人事採用担当部長の福島隆史さんは長年、技術畑を歩んだ後、人事部に異動した。

「障害者雇用をとくに意識はしていませんが、現在の雇用率は維持していきたいですね。障害者は通勤がたいへんだと思います。公共交通機関が不便な事業所もありますから、その事業所の事情に応じて進めています。無理をすると、長い年月の間にどこかで破綻が生じますので」

シャープの経営信条は「誠意と創意」。シャープ本体は、五〇年間、社員をリストラしていない。



シャープ本社、人事本部人事採用担当部長の福島隆史さん

「シャープでは戦後に一度だけ人員削減が避けられない事態があって、にがい思いをしたので、雇用は大事にしようというのが、一番大きなテーマです。経営は長期的なスパンで見ていると思います」

「職制はきちんとしています。上下の壁は少ないですね」

「従業員を大事にすることが、ごく自然にできている会社だと思います」

「シャープは自分たちが言うのも変ですが、『まじめな人』『親切な人』が多いですね」

同席のみなさんは同感のよう……。障害者と馬郡社長とのかかわり方から、シャープ特選工業のコミュニケーションのよさも伝わってきた。

「ベストを尽くすには、その国、その会社をまず好きになろうというのが、私の基本的なスタンスです。インドネシアに出向したとき、先輩から『そ

この会社を第一に。本社を向いて仕事をしたらだめだ』と言われて、肝に銘じました。ここでも、ベストを尽くしたいです。将来を見据えた事業展開を行いながら、障害者の積極的な職場開発を推進していきたいですね」

「特例子会社」が設立されて半世紀。第一号のシャープ特選工業は、親会社の中の一会社として、しっかり生き続けている。